

フェリシアアノはこちらに振り返った。

「えっちゃんって、本当はどう書くんだっけ」

「戸籍からして平仮名だから大丈夫。子だけ漢字」

「そっか。『え』とか『つ』とかって、ラインがセクシーだよなー」とウインクを返される。

「幼なじみが『御厨優鶴』といって、テストのたびに『あなたは私に一分超越すべき』となじられてた」

紙ナプキンにその字を書いてみようとしてフェリシアアノは途中で挫折し、ルートヴィッヒはバランスが気に入らなかつたか、二度目の挑戦を始めた。

と、フェリシアアノの更に向こうから声がかつた。フランシスだ。

「『優』には『ゆ』という読みはないよね？」

確か、と頷いたが、アルフレッドは「『う』という読みはあつたはずだぞ」と付け加え、フェリシアアノが「日本の漢字は複雑怪奇だ」と肩をすくめた。

「いやー、確かにそうなんだけど、だから一層『気づき』にときめかされたりするぜ？ ああ、漢字の『海』の中には『母』がいるんだぜ」

「——」

「それが、どうしたんだ？」

聞いたのはルートヴィッヒだった。

「フランス語の母と海は同じ発音なんだよ。運命感じるじゃない？」

アルフレッドが手を伸ばして布巾をとった。

「発見っていうけど、それ、詩にあるよ。『海よ、僕らの使ふ文字では、お前の中に母がある。そして母よ、仏蘭西人の言葉では、あなたの中に海がある』」

「ほんとに詳しいな」

「コクゴに特に手厳しい自発的家庭教師の薫陶で」

「本田さんか？ それはむしろ羨ましいな」

そう言うと、コクゴの家庭教師など要らなかつたはずの三人がしみじみと頷いた。

「いや、ほんとに厳しかったんだぞ！ きくじゃなくできちくって感じ？」

不発に終わったアメリカンジョークを紛らわすように、きゅ、と皿を拭き上げて、アルフレッドが聞いた。

「ちなみにえっちゃんは何でその名前なんだい？」

「父曰く、『誰にでも書けるやさしい名前』だそうだ」

「ほんとだね！ 俺たち外国人にはすごく親切な名前だ」